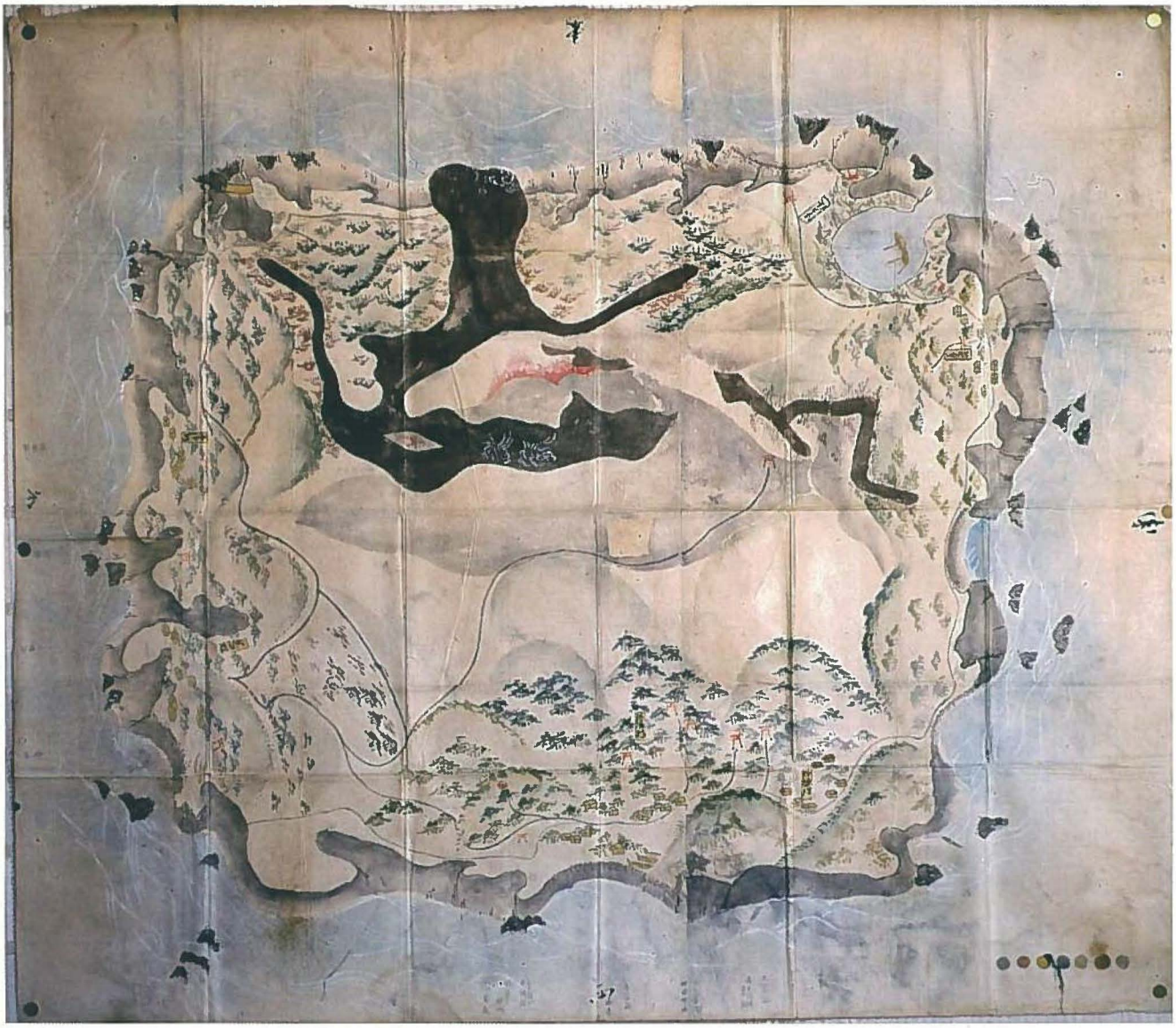

伊豆大島・安永の大噴火（伊豆大島火山博物館 蔵）

伊豆大島・安永の大噴火

伊豆大島火山は、最近1,700年間に12回の巨大噴火を引き起こしており、それぞれに数億トン規模のマグマを噴出してきた。そのうち最も新しい巨大噴火が"安永の大噴火"である。

1777年（安永６年）８月31日、三原山の山頂火口から噴火が始まった。激しい爆発音とともに、強い地震が断続し、大量のスコリア※が全島に降り注いだ。長さ３cmから５cmほどの火山毛が島中に降ったと伝えられている。夜になると、山上の雲が赤く輝く火映現象が、江戸の品川沖からも望見できたという。

噴出物に厚く覆われた農地では、収穫は皆無となり、海も濁って魚が島に寄りつかなくなったため、出漁もできないという有り様であった。

噴火は、翌1778年（安永７年）の初頭まで断続的に続き、いったんは鎮静化したものの、４月27日に活動を再開して、北西斜面に溶岩を流出、長さは約４kmに達した。このとき、カルデラ内にスコリア丘を形成している。

その後、５月末から９月末まで、噴火の勢いも衰えたので、島民は山仕事を行うことができた。

だがそれもつかの間、10月から、噴火は前にも増して活発になり、11月６日になると、南西方向に溶岩を流出、野増村と差木地村の間にある赤沢に約３km押し出した。

さらに11月15日には、北東方面に大量の溶岩を流出しはじめた。溶岩はカルデラ床を埋め、東方に流下して海に入り、海中に100mほど突き出した。

当時伊豆韮山の代官であった江川太郎左衛門は、このときの状況を、江戸幕府へ次のように報告している。「海中へ焼石押し出し、波打際より沖へ壱町ばかり水上炎夥しく燃え、高さ弐間程、横幅壱里程、大石にて築き上げ申し候」。

さしもの大噴火も、年が明けて1779年に入ると、活動は次第に弱まり、終息へと向かった。

この巨大噴火を通じて、全島に降り積もったスコリアや火山灰の厚さは、平均50cmにも及んだ。また、この間に放出された噴出物の総量は、６億5,000万トン前後と推定されている。

安永の大噴火を示すこの古絵図は、現在「伊豆大島火山博物館」に展示されているもので、絵図の左が北、上が東を指している。地図としては正確さを欠くが、三原山の山頂噴火や、カルデラ床を埋めて海岸にまで達した溶岩流の分布が丁寧に描かれている。

溶岩流のうち、左上に細く流れ出しているのは、1778年４月27日の溶岩、右手つまり南西方向に伸びているのが、11月６日に赤沢へ流下した溶岩、東側へ幅広く海にまで達しているのが、11月15日に流出した大規模な溶岩流である。

なお、この絵図の右上つまり南東の端に、波浮港があり、湾内に浮かぶ船が描かれている。

そもそも波浮は、９世紀に発生したマグマ水蒸気爆発によって生じた内陸の火口湖であったものが、1703年（元禄16年）に起きた元禄地震津波によって海岸部が破壊され、外海と繋がってしまった。その後、1800年（寛政12年）に崖を切り崩し、湾口を拡げて、船の出入りができるようにしたため、波静かな良港となったのである。

したがって、湾内に船が描かれているということは、1800年以後、安永の大噴火から20数年を経た19世紀のはじめごろに、当時の状況を復元しながら、この絵図は描かれたものであろう。

なお近年、伊豆大島は1950～51年、1986年にも溶岩を流出するような噴火を起こしているが、噴出物の総量は、安永の大噴火など巨大噴火の10%程度に過ぎない。

伊藤 和明（防災情報機構NPO法人 会長
／伊豆大島火山博物館 名誉館長）

※ **スコリア**：火山の噴火に伴い、玄武岩質のマグマが発泡することにより多孔質となった、黒色や暗褐色の降下噴出物。